

沢来水 俊寛一石井桑水 別れの盃一小林
 皓水 巖流島一島田春水 湖水乗切一中谷
 裏水 城山一荻野甲水 舟弁慶一小山田眞
 水

△：錦心流彌生研鑽会 三月二十九日昼大阪
 太融寺会館(主催松原龍山氏) 一水会々々
 詩一有志 屋島の誓一宮ノ原聖水 井伊大
 老一中西鏡水 本能寺一植田豊水 誠忠遺
 芳一番匠潜水 戦国武将一木下皇水 天草
 四郎一田中敷水 巨星墜つ一中山鳳水 働
 哭の海一小川吟水 桜狩一馬場鴨水 新撰
 組一東憲水

△：筑前橋会全国大会 四月五日昼夜名古屋
 東別院青少年会館(主催同会) 井伊大老
 一野浪昭男 白虎隊一島田瑛千 加藤清正
 一岩崎旭心、射手矢旭将 藤戸の渡一福本
 旭蘭 本能寺一松居旭松、加藤旭絃 舟弁
 慶一沢田旭麗 龍の口一樋口旭秀、堀川旭
 颯 関ヶ原一中山旭礼 伽羅の兜一金子旭
 昭、城戸旭濤 曲垣平九郎一白石旭優 川
 中島一安住旭康 井伊大老一太塚旭峯 青
 葉の笛一丸山旭壯 北の庄一長谷川旭鶴
 大徳寺一水谷旭甫 平野国臣一前田旭城
 那須与市一長尾旭蘭 大楠公一片山旭浜
 晴田川一矢吹旭美津、石河旭桜、北村旭良
 揆一稲葉葵水、鈴木督士、橋旭宗、堀田
 旭甲 壇の浦一松村旭奎 石田三成一佐伯
 旭瑛 羅生門一友田旭泉、小野旭枝、江本
 旭清 茨木一三木旭照、久徳旭蘭 巖島の
 戦一菊地旭蘭 大楠公一吉田旭達 小栗栖

京都市北区笠笠西馬場町二九 和田才一ビル二〇一号 電話(462)八三二六

一木下旭好、木下旭龍 禪師と正宗一志水
 旭城、堀田旭甲 龍の口一鈴木旭芳、山本
 旭城 加藤清正一松本旭柳、光田旭扇、角
 田旭峯 粟津ヶ原一林田旭華 鴨川の露一
 岩見旭香 西郷隆盛一西村旭一声、杉義隆
 一稲垣旭玲 北の庄一山元旭錦 安宅一山
 崎旭翠

△：錦びわ新作発表演奏会 四月十日夕東京
 日本橋才一証券ホール(主催桜会) 小曲
 植輪、同都会の灯一水藤錦櫻 鶯宿梅一松
 井きみ江、古川芳江、小島櫻舟 誉れの兜
 一新部桜水 小曲石童丸一水藤五郎 飯盛
 山懐古一藤波桜華淨幻想瀧陽江一西村錦風、
 絃桜水 利休の最期一石田修水、絃錦櫻
 黒田武士一村木桜柳、絃桜華、桜水、立方
 宮坂水恵 北斎幻想曲一小沢錦柳、水藤五
 郎、絃錦櫻、江風 水際の藤一櫻舟、桜華
 絃錦櫻、桜華 戻り橋一吾妻江風、琵琶舞
 尼子上月記一錦櫻、桜水、桜華、江風、立
 方中村冠子 外に詩吟四題

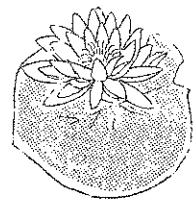
△：紅会第八回演奏会 四月十一日昼東京新
 宿伊勢丹ホール(主催同会、司会NHK鈴
 木健二氏)くれない一会員一同 義士の本
 懐一相田元子、絃旭千栄 安宅の関一佐久
 間旭連、岡田旭蓮、高野旭美美、安江旭久
 絃旭桂、旭光 加茂の宵月一吉田旭扇 川
 中島一岸旭秀、絃旭綺 彰義隊一須田岳誠
 羅生門一青山旭光 菅公一ジョージ・ギン
 ユ 高田の馬場一吾妻江風 舟弁慶一田中
 旭千栄 大森彦七一原島旭冠 湖水渡一仲
 川旭朋、絃旭綺 衣川一原旭朝、絃旭柳
 五常の徳一小笠原旭星、原島旭粧、絃旭綺

昭和四十五年五月一日発行(非売品)
 603 編集者 植 村 翼 水
 発行所 京 絃 社

琵琶 絃
 機関紙 京 絃
 才一九一號 京 絃 社

「平家物語」の物語 (三五)

大原 御 幸



かかりし程に、文治二年の春の比(こ
 ろ)、法皇、建礼門院大原の閑居の御住
 居、御覽せまほうし思召されども如月・
 彌生の程は、風烈しく、余寒も未だ尽き
 せず。峯の白雪消えやらで、谷のつらら
 も打ち解けず。春過ぎ夏来たって北祭も
 過ぎしかば、法皇夜を籠(こ)めて大原
 の奥へ御幸なる。

「薨(いらか)破れては霧不所の香をたき
 炬(とぼそ)落ちては月常住の燈をかかぐ」。
 何とも陀しい山寺の風情に、法皇の胸にも熱
 いものがこみ上げてきた。「これが嘗って天
 子の御生母と万民から仰きかしたかれた方の
 住居だろうか」。ふと見ると、前方の翠黛(す
 いたい)山を、がけ道依いに降りて来る墨
 染姿の尼二人。

愛児安德帝と、夫高倉天皇への追慕、そし
 て平家一門の供養に明け暮れる建礼門院を驚
 かせたのは、後白河法皇の突然の訪問だった。
 法皇とは嫁とシユウトの間柄だが、平家追討
 の院宣を下した張本人、いわば仇でもある。
 両者の心の中は複雑なものがあつたらう。

「あれは何者ぞ」と法皇。女院に仕える阿
 波内侍が「花籃(はながたみ) 眩(くら)かけ、岩
 躑躅(つづじ) 取り具して持たせ給いたるは、
 女院にて渡らせ給い侍ふなり」と、むせび
 泣く。法皇も涙をおさえることが出来ない。
 国母と云われた人が、このような姿で花をつ
 まなければならぬとは……

当時の大原の里は鹿が住み、人跡まれな山
 里。僅か十余人の供を連れた法皇は、夜明け
 前に御所を出て鞍馬路を北行、大原へ向った。
 琵琶や謡曲大原御幸(おはらごころ)などで
 広く知られた平家物語の泣かせどころの一つ

「逢うべきか、逢わざるべきか」と暫し
 る。「逢うべきか、逢わざるべきか」と暫し
 ためらう。仏門に入ったとは云え、未だ若い
 女院である。たとえ相手が同じ法の道の人で

あつても、会えば心の疵に触れ、悲しみが再
 び深まると思ふと足は重かった。「早ばやと
 対面して法皇に還御願(かへりまがほ)つては……」と、おつき
 の人々に説得され、胸かきむしられる思いで
 庵室に足を運ぶ女院であつた。

ところで、後白河法皇はどういう気持ちで御
 幸を思い立ったのだろうか。苦惱のどん底に
 いる義理の娘が、どんな生活を送っているの
 か。目のあたりに見、孫安德幼帝の最期の様
 子も併せて聞きたかつたのだろうか。そして慰
 め、励まそうとしたと考えるのは如何にも素
 直な見方ではあろう。

しかし頼朝をして、天下一の大天狗と云わ
 しめ、清盛にも恐れられた怪物の後白河法皇
 だけに、この御幸の意味も色々にとられて居
 るようだ。法皇が女院に話しかける内容につ
 いてみても、平家物語が優しく同情する調子
 であるのに対し、源平盛衰記では人生の無情
 を説き、迷いを押えるようなニュアンスにな
 っている。

法皇は源平抗争の中で、自らの果たして来
 た役割を今静かに考え、或は懺悔しているの
 だろうか。平氏には源氏追討を命じ、源氏に
 は平氏討伐を促し、源氏の世になつては義仲
 頼朝、義経ら相互に同族追討の院宣を次ぎ次
 ぎに乱発してきた。めまぐるしく変る乱世
 の台風の目にあつて、栄枯盛衰をじつと見つ
 めてきた非情の目。その目の前にいるのは、
 権勢並びなき清盛の愛娘として、国母として
 一身に榮華を担い、そして寿永の嵐と共に果

敢なくも散った悲劇の佳人、建礼門院である。二人の目は合った。それぞれに万感の思いを走らせながら……

女院が四季の花をつんだ翠黛山は、春の陽光を浴び濃霧に包まれていた。「人の世の無情は今も昔も変らないでしょうが、建礼門院様の場合は、短い時間の中に鮮やかに示されたから、後世の人々の心を打つのでしょうね」と語るのは寂光院入りして五十年という小松智光尼。「大原は誰しもが一度は訪づれて、自分の来し方行末をじっと考えてみるのにおさわしい場所と申します。そのような意味で古都保存法とかの区域に指定され、大遷葬しぐ思っています」。静かな寂光院の庭。法皇が池水に「汀（みぎわ）の桜散りしきて」とよんだ桜は、いま根の株だけしか残っていない。そのそばに新しい桜の苗が植えられ、この春には清らかな花びらをつけたという。その若葉を尻ながら、この木もやがて何時かは枯れて行くのだな……と、ふと思うたたづまいであった。

狂醉亭漫録 (五十四)

古谷 竟水



最近作家の五味康祐氏が、赤穂事件に対して従来とは全然異なる意見を発表され、之に依

ると原因は浅野の吝嗇の為で、この結果浅野は天朝に対し不敬を犯して黒、吉良は自己の職責遂行上浅野に注意した迄で白、延いて浪士の討入は仇討に非ず、単に不敬罪人の遺臣の暴挙であると結論されている。併し考証も相当詳細を極め、単なる思い付きではないので、今回は左に之を紹介する。(要旨抄録)

忠臣蔵事件に対する五味康祐氏の説

○ 討入後吉良邸に十七人の遺体があった。一つは炭小屋の前で野介である。この死体は刀を握り、左の股右膝頭両手の内等六ヶ所の疵があり、何れも向う疵である。「刀は血付申し、柄に切込み之有り、脇差は見え申さず」とは幕府検視人の報告である。

米沢上杉藩塩井家覚書によれば、上野介の疵は二十八ヶ所「随分お動き遊ばされ候御様子段々相知れ、向う者には手を負わせなされ」とある。兎に角上野は発見された際震えていたのではなく、充分抵抗したらしい。

○ 上野介の気性は烈しく、融通のきかぬ頑固な男で、尊大ではあるが賄賂等で軟化する人物ではなかった。

○ 内匠頭の勅使接待は元禄十四年が始めてでは無く、天和三年(一六八三年)十七歳の時一度勤め、今更上野介の指導を受ける必要はなかったのである。

○ 此役には選ばれる大名は徳川三百諸侯の内約四十家位で、此の中の大名は一代に一度当るか否かの程度で、浅野に二度当たった事は例外とも見られる。

○ 内匠頭は従来言い伝えられる様な名君ではなく性格は吝嗇であった。その為幕閣から出費を強要されたものと見られる。「筆のすさび」「閑田次筆」等によれば、浅野藩住民達は苛酷な年貢に苦しめられ、浅野家取潰しの際は、領主が代れば少しは暮しが楽になると喜んだとある。

○ 内蔵助は内匠頭から好かれず謹慎を命ぜられた事もある。政務を執り仕切っている大野九郎兵衛は苛酷な税を取立て、殿様のお気に入りだったとある。(その大野は城明けし直前金を持って夜逃げしたのは事実である)大石を軽んじ大野を重用した点に内匠頭の暗愚さがある。

○ 小宮山南梁の記録によると天和三年浅野家接待役の支出は慶長小判で四百両、之は元禄改録の小判に換算して約千両で、現今の約二千萬円に該当する。元禄十年の伊東出雲守は千二百両使っているのに、内匠頭は元禄十四年の場合、七百兩に限定して係の者に命じた。之では勅使に従来通りのサービスは不可能で上野介は此点に憤りを発したのである。

赤穂藩は裕福で現今の金で年収約十億あり、然るに此度の接待費を僅か千万円余りで済ませようとした吝嗇が結局家を亡ぼす事になったのだ。

○ 内匠頭の尤も器量を下げたのは、勅使を迎える儀式的場、即ち白書院松の廊下で刃傷沙汰を起した事である。幕府が賞賚を迎える時点に於て、一役人たる浅野が私のもめ事か

ら刃物を振るった感覚は、現代人の感覚でも、その醜態無慮馬鹿さ加減は想像され「場所柄もわきまえず不届千万なる所行」と裁判され、事は皇室に対する不敬罪をして切腹、藩取潰しの処置を執られたのだ。

○ 不敬罪を犯した者の遺臣が日本人なら何故謝罪しないのか？又何故仇討等したのか？(元禄十五年十二月十四日には雪は降っていない)以上が五味氏説の前半である。

その後半は大石の遊興から始まり大体大同小異で、お軽は一子を挙げて居るが、実家を一字屋とあるは何故か、又大石の仇名白魚大臣の由来の意味が説明されている。白魚は京都地方で別名水魚(「常盤御前」の琵琶歌に、網代の水魚ござんなれの一句がある)と称し透明の湖魚で、生の海魚の無かった京都地方では最上の佳肴であり、高価の為少量を大きな籠に盛って売捌いたもので、大石が遊興の往復駕籠で見得を張った事を白魚に例えたものと称している。

○ 討入の殊勲者として堀部安兵衛、不破、武林、奥田等を挙げ、不破の浪入した原因は、彼は据物斬に熱中した結果新墓の死骸を掘り試し斬りをし主君の耳に入った為としているが、之は講談や浪曲で有名な話である。又五味氏は武林は十両三人扶持の軽輩で、朝鮮人だと断定しているが理由は書いてない。堀部が事件後知己の大学者細井広沢に其夜働いた左右の籠手を贈り、添状に「甚だ働きしと見て籠手の布、指の所などハズれて血は柿色

になつて付き申し」とあり、又討入当夜錆びて抜けぬ脇差を持ち、後日笑草になったのは二百五十石取の近松勘六で、之は細川家の聞書に「夜討の節泉水に転び申され水入り申候由」とあり、芝居や映画で泉水に落込むのは近松勘六という事になる。大石の佩刀は大小共相州物で「刀の切先一尺許り血付居申候」と堀内伝右衛門は記している。何れにせよ討入連の内働き盛りの者は二十人に満たず、この少数で吉良邸になぐり込みをかけた大石一党の度胸に世間は驚嘆したのだ。

○ 一世の碩学伊藤仁齋は「予赤穂に仕えざりしは大幸也(中略)大石の如く吉良を殺すが如き不義の振舞は必ずす可からず」と云い、佐藤直方は「内匠頭の私怨にて上野介を討つ、何の仇ぞ、内匠頭の所業こそ未練腰抜けの仕形なり」と評している。

○ 赤穂の人河野通倫の「赤水郷談」には、勅使接待決定の通知を受けた大石は「江府の書状を読み、江戸の有司等吝嗇にてありける故竟束なしと思ひ、何となく心に徹しけるならむ」とある。

以上は五味説の概要であるが、従来美化された赤穂事件とは大分相違した見解なので参考の為、敢えてご紹介する次才である。

鈴木貫太郎大将のお話によりすると、只一度二・二六事件のとき陸軍が激起部隊に対する処置をきめかねていたとき陛下から叛乱軍として討伐せよとお話があった、陸軍もその決定したのが唯一の例であるという事であり、天皇が内閣の助言と承認とによって行動されるように規定せられていたのと実質的には違わないのであります。又内閣総理大臣を御任命なさりますについては、當時は元老

切抜帳から (四八)

平井 春嶺

終戦の真相 (二六)

十四、講和条約とアメリカの占領政策(3) 新憲法は、日本の国體を変えたものではないのであります。

明治憲法に於きましては、天皇の御親政が定められて居たのであります。実際の運営に於きましては、内閣総理大臣が責任を負う制度でありまして、大正天皇以後内閣から陛下に奏上して、天皇がいけないと仰せられたことは一度もございませぬ。即ち御言葉にも又陛下の方から積極的のごうせよと、御命令になったことは一度もないのであります。又軍隊に対する統帥権についても殆んど同様であり、陸軍参謀総長、海軍々令部長から奏上することをそのままに御嘉納になる習慣でありました。

○ 討入の殊勲者として堀部安兵衛、不破、武林、奥田等を挙げ、不破の浪入した原因は、彼は据物斬に熱中した結果新墓の死骸を掘り試し斬りをし主君の耳に入った為としているが、之は講談や浪曲で有名な話である。又五味氏は武林は十両三人扶持の軽輩で、朝鮮人だと断定しているが理由は書いてない。堀部が事件後知己の大学者細井広沢に其夜働いた左右の籠手を贈り、添状に「甚だ働きしと見て籠手の布、指の所などハズれて血は柿色



重臣におたずねがありその意見をそのまま御採用になる例でありましたが、これが新憲法では内閣総理大臣の任命は、元老重臣の推薦の代りに国会の指名ということになりました。結局新憲法は今迄の慣習をそのまま法文化したのに過ぎないということが出来るのであります。やはり天皇陛下は国家伝統であらざるに、やはり御座りません。米國が何から何まで伝統を断ち切ろうとしたのに、國家伝統だけは残りました。即ち日本國はこの伝統を基礎として、そして又再び歴史のある、皆様の終戦直後の日本の状況を思い起して下さると思ひます。伝統の精神のない人間、申さば人造人間としての取扱ひを受けた日本人がどんなものであったか、全く利己心だけの人間であつて、所謂道義全く地に落ちた日本でありました。

尚、この際一言申し上げておき度いと思ひます。上來申し上げて参りました通り、今度の終戦は終始天皇陛下が、親ら御指導になつたものであります。或は、天皇陛下が斯くの如く強いお力をお持ちになつて居られるならば、何故開戦のとき、その御意志に反する戦争の開始をお力をお力でおとどめにならなかつたのかという疑問を持つ方があると思ひます。その理由は簡單でありまして、開戦の際は、東条内閣に於ては、天皇陛下が戦争を避けたいと考へて居られたことは万事知つており乍ら、内閣に於て開戦ということをかきめて、

それに対する御裁可を仰ぎましたので、天皇陛下は当時の政治慣習に従つて御裁可になつたのであります。此の時天皇陛下が如何に戦争に突入することを避け度いと考へて居られたかということ、内閣に於て起草した開戦の御詔勅の草案に対し、天皇陛下の御思召によつて、特に「朕力志ナラムヤ」という一句を挿入せしめられたことによつても明かでありました。

只今も申し上げましたが、明治憲法制定後、特に大正天皇以後の帝王學に於ては、「天皇は統治すれども政治せず」という英國風の教育でありまして、申さば完全な責任内閣制であり、天皇は内閣に於て決定したことに對しては、これを必ず裁可相成るといふ慣習が出来上つていたのであります。従つて終戦の時も、若し鈴木内閣が戦争継続ということを決して、御裁可を仰ぎましたならば恐らく天皇陛下はこれを御裁可に相成つたと存じます。鈴木総理と東条総理との違ひは、一は天皇陛下のお考えを如何にして実現するかということに努力したのに対して、他は天皇陛下の御考へをかえても内閣の信する所を遂行したということでありまして、何れも忠誠心に於ては変わりなかつたと致しまして、所謂伝統祖述ということを具體的行つたことが鈴木総理の偉い点であります。

しかも責任は全く内閣に於て負うのでありますから終戦の閣議決定も、陛下の御聖断によつて決定した形はとらず、各大臣が御思召

しを体し、自らの決意によつてそのような閣議決定をした形をとつていたのであります。鈴木総理の辞表に、「閣議ヲ以テ決スル能ハスニテ御聖断ヲ仰キタルト一度ナラス恐懼何ヲカ之ニ過キン」と記されておりますのは、鈴木さんの責任内閣に關する信念を表わすものであります。開戦の際、東条総理が若し鈴木総理と同じように、天皇陛下の御思召の通り実行していたらと思ひますと深い感慨を覚えるのであります。(以下次号)

京都琵琶協会の
懇親演奏旅行

はくす



毎年一、二回全国各地に旅行して、會員相互の親睦と、行く先々の琵琶関係の人々との交歓懇親を続けている京都琵琶協会は、二月の定例茶話会で、東京と箱根温泉地へ二泊三日の旅をする事に意見が一致し、會員田中鷗水氏が企画折衝等万端を担当して、三月二十二日午前九時京都発新幹線ひかり号で一行二十八、嬭々として一路東京に向つた。

万国博の影響で車中の混雑を予想していたが、意外にも閑散で、我々だけが一軍軍切りのような気楽さ、各自大声で勝手な熱を吐きながら十二時前東京駅着、鈴木密水氏がホムムに出迎えて下さつてそのまゝ中央線で新宿に行き、駅前歌舞練場で本日開催の日本琵琶

振興会例会々場へ向つたが、一階入口に「琵琶演奏会」と「京都琵琶協会の歓迎」の大きな立看板があり、人目を引いた。会場は尾津才二ビル六階の舞台付置敷大広間で、このビルには各階毎に和洋華などの食堂があり、我々も好みの軽食を摂つてから会場に入つたが、前後して旧知の琵琶人数氏が来場され、挨拶を交わして旧交を温めた。異郷にあつて同好の士に逢うということは、言葉に尽きせぬ懐かしいものである。

それから振興会に合流して一時から地元と地方の交互演奏開始。薩摩、錦心、錦、筑前各派演奏者や作曲家、吟詠家、一般聴衆などが完全一体となつて琵琶ムードに浸つたが、さすがに地元男女教氏の演奏は素晴らしく、特に藤波櫻華女史の愛児六才の白林ちゃん、女史の絃で歌つた「城山」の一曲は、音程も節調も完璧の一語に尽き、琵琶歴何十年を誇る大のおとも顔負けの体で、終始ヤンヤの喝采が堂をゆるがした。素人名人会などで幼くない子供が出ると、只可愛らしいだけで上手下手に拘らず拍手を送るが、白林ちゃんの場合は可愛いののは勿論だが、立派な演奏に對しても感激の余り惜しみなき拍手喊声で大向うを喰らせた。

夕五時、我々は箱根湯本温泉に向うため中座失礼したが、この時分には参會者九十人にふくれあがり、一同の拍手に送られて鈴木密水氏の案内で、望月啞江、緒方晴舟、若宮旭登、菊地義美、井上義雄諸氏同行、六時の小

田急電車特急ロマンスカーで湯本着、折悪く俄雨となつていたが、箱根強羅の押川旭葉女史が懇々湯本駅頭に出迎えて下さつて色々配慮を頂き、旅館では先づ温泉で京都からのアカを落とし、大広間で押川女史を含めた一行

演奏會 告知	
時	五月二十四日(日)午後一時
所	兵庫東芦屋市公民館
主催 薩摩琵琶四明会	
(來聴 歡迎)	

演奏會 告知	
時	六月七日(日)正午開演
所	京都東山安井金比羅宮會館
主催 京都琵琶協会	
(來聴 歡迎)	

約二十人の宴を開いて琵琶、詩吟や隠し芸などで楽しい一夜を過ごした。翌二十三日は、前夜来の雨もカラリとあがつて日本晴れの好天となり、十時観光バスで湯本出発、勇大な十国峠を経て声の湖等を觀

賞、湖畔のレストランで昼食の後、九十九折(つづらおり)の山坂道を上下しながら還かに霞む富士の靈峰や、谷間一面に見える樹葉に点々たる残雪が、恰もクリスマスツリーの林を見るような美景を車中から眺めながら三時ごろ一条旭齋氏の湯河原荘に到着、一息呂浴びて広間に集り、小田原から来訪の二、三の琵琶人を交えて演奏会を開き、夕刻から宴に移つて琵琶よりも上手な隠し芸や香想天外の珍芸などが続出、春宵一刻を惜しんだ。

明ければ二十四日、思ひ出多い旅を終えて帰落の日。午前中ゆっくり休養して正午湯河原出発、熱海に出て中食や土産ものなどを整え、熱海発三時の新幹線こだま号で、愉快に過ごした三日間の感涙にひたりつつ薄暮京都帰着解散したが、今回の壮事に当り東京鈴木密水氏が三日間に亘つて献身的に斡旋して下さつた御好意に對して深甚の謝意を表すると共に山崎光水氏、鈴木鉦次郎氏、押川旭葉女史、望月啞江氏、一条旭齋氏を始め日本琵琶振興会関係の人々が、真心溢るる物心両面の御配意に、改めて衷心御礼を申し上げる。尚協會員田中鷗水氏が、当初の企画から旅行中の世話など万端取りしきつて下さつたのと、三日間天候に恵まれて予定通りの行動に終始出来たのは誠に幸いであつた。

(一行次の通り)伊吹正陽、戸倉旭嶺、田中鷗水、中島真水、梅原旭齋、矢吹藤水、木村維水、美登里進水、水内媿水、平野忠嶺、同夫人、植村寛水。一敬称略

馬瀬檜水氏逝く

錦心流一水会大阪支部長馬瀬檜水氏は、昨秋米リユウマチスのため元気を無くしていたが、今冬の厳寒で肺炎を併発して関電病院に入院加療、一時小康を保ち快復を期待されていたところ、三月に入って肺炎再発、遂に同月三十日午前六時三十分惜逝された。享年七十。

氏は大正七年仙台で田村秋月氏に琵琶の手ほどきを受け、後、名古屋露川螢雪氏を経て永田宗家の直弟子となり総伝を許され、昭和八年大阪に転住、二十九年一月一水会大阪支部創設と同時に支部長兼東京一水会本部副会長を五年間勤めた外、数年前から再び大阪支部長に押されて現在に至ったが、永年に亘り支部の統率親和と錦心流琵琶の発展普及に尽くした功績は誠に大で、今この計に接し転た哀惜の情を禁じ得ない。

告別式は翌三十一日午後二時から三時まで羽曳野市高鷲三丁目五ノ一〇の自宅で厳肅に営まれ、親戚知己や町内会の人々大勢のほか京阪神琵琶人多数が送葬した。法名至信院釈横徳智量居士、謹んで御冥福を祈る。

京都琵琶協会 三月十五日(日)午後一時三月定例茶話会 から市内徳雲寺で開催、植村寛水の「本能寺」を序奏に出席者順次一曲を熟演のあと、①春季演奏会を六月七日(日)市内安井金比羅宮会館で開催決定、②三月二十二日から二泊三日の関東旅行の具体的打合せなどをして八時散会した。出席者伊吹正陽、田中鶴水、中島旭穂、梅原旭穂、矢吹華水、木村維水、美登里進水、水内親水、平井春嶺、植村寛水、客員福井吉野洲水、敬称略。

武絃会第七十 三月二十二日(日)午後一時六回研習会 より小金井市福祉会館にて開催、太田道灌、大村鼓城、小松の操、坂本錦道、月下の陣、渡辺喜山、桜井の駅、工藤清秀、物狂、加藤喜水、大高源吾、村木桜柳、本能寺、伊藤警水、吹雪の敵、佐藤皓水、彰義隊、清水源城、以上順演の後六時閉会した。当日は新宿歌舞練場に於ける日本琵琶振興会の演奏会に京都からの多数参加を期待してその方に行つた会員が多かつたため武絃会の出席が少なかつた。敬称略。

日本琵琶振興会 三月二十二日(日)午後一三時 例会 時より東京新宿駅前尾津才二ビル歌舞練場に於て開催。当日は京都琵琶協会の御一行十二氏を迎えて定刻既に四十数人に達し近時稀に見る盛況を呈し、井坂旭良、佐藤旭天紅、花方旭路三女史の合奏松風、清水煎茶賦を序曲に、城山、水藤五郎、栗津

ケ原、木下旭龍、薩摩守、緒方晴舟、旅、青木晴我、鉢の木、大井錦定、名槍日本号、水内親水、田村邸、田中鶴水、矢吹華水、重衡、大和田鶴道、月に思う、鈴木密水、書道吟、鶴井沢百華、望月嘸江、桶狭間、木村維水、城山、藤波白林、石童丸、梅原旭穂、旅順開城、伊吹正陽、元冠、平井春嶺、旅の芭蕉、水藤錦穂、道成寺、植村寛水、以上で昼の部を終り拍手を以て京都組を見送る。(六時発ロマンスカにて箱根へ)。少憩夕食に続き夜の部に入り飯盛山、徳古、藤波桜華、若き致盛、谷口旭穂、絃原島旭粧、桶狭間、山木岳盛、本能寺、長谷川錦舟、秋海棠、杉山旗水、大高源吾、村木桜柳、井上雅翔師一門の小曲四題、①茶の湯、②鶴田雅鈴、③いけ花、④白倉雅旭、⑤菅公、⑥甲田雅順、⑦秋のみのり、⑧井上雅翔、河谷雅泰掛合、日本を愛す、長井吟城、錦の御旗、鈴木鶴謡、恩響の彼方へ、山本隆水以上の熟演があり八時五十分和やかに散会した。敬称略。(印は京都琵琶協会員)

本日来会者の色別次の通り(地元) 錦心流 26、正派 7、錦びわ 6、筑前橋会 6、同祖会 7、吟詠家 3、雅翔会 4、作詩者 2、一般 16 (京都) 各派 12 合計 89 人

天津旭八千代女史 三月二十七日(日)昼夜夜京名流舞踊会に出演 都南座に於ける才十二回京都芸術祭名流舞踊大会に長唄、清元、常盤津、琵琶、箏曲、地唄、哥次、沖繩舞踊などによる各流派二十六番の豪華絢爛な舞踊会

が催され、琵琶部は天津旭八千代女史が参加して伊藤旭暢、西川旭操、富樫旭桂、木庭旭山、樋口旭総各女史助演、昼の部に「天の羽衣」、夜の部に「玉藻」を上演されたが「玉藻」は琵琶の外琴、笛、太鼓などが入って花柳寿山、早瀬輝昇両師が舞い、琵琶の真価を遺憾なく発揮して定員二千人の会場は割れんばかりの盛況を呈した。

中島旭穂、小林旭公、森田 日本民主同盟特別参拝視察団に参加の三氏は総勢八十名と共に三月二十五日京都出発四月一日帰洛したが二十九日夕琉球新聞ホールで開催の「沖繩県民を激励慰問する夕」で、秋風故郷の山、小林旭光、森田旭穂、新撰組、中島旭穂がそれぞれ演奏好評を受けた。当夜は外に吟詠吟舞五、小唄振三、長唄舞一、琴と尺八一、日本舞踊二、吹奏楽教番が上演された。

速見是水女史 三月二十一日女史の来阪歓迎会を以て松原龍山氏の主催で大阪府立労働会館に於て同日午前十時から琵琶関係者が集り歓迎会が催された。

芸の友二十 東京鈴木菅士氏主宰の「芸周年祝賀会」の友は三月号を以て創刊二十周年を迎えたが四月十八日東京上野静養軒に於て琵琶関係者多数を招いて晩餐祝賀会を開催された。当日は琵琶、詩吟界の大家数氏の

祝賀演奏が午後四時から五時半迄続いた。

静岡琵琶協会 四月二十五日(日)島田市公会堂に於て塚田華山、佐藤庶水、小川益水、原夏水、小川野水、伴野鶴風、岡尾鶴城諸氏が出演して演奏会が開催される。

京都琵琶協会五月定例茶話会 五月三日(日)午後二時西向日町梅原旭穂女史宅(電話931一六九一番) 当番幹事植村寛水、矢吹華水、水藤氏

北の政所 撰政と閑白の妻一般には秀吉の母の大政所(おおまんどころ)にならって彼の正妻の代名詞に使う場合が多い。

淀君と較べて余りにも地味で賢夫人の名が高いが秀吉の死後落飾、高台院満月尼となった。京都東山の高台寺は秀吉の後生を弔う彼女のため家康が建立したもの。

よもやま (敬称略)

石田源水翁追悼演奏会 三月八日(日)昼夜夜京麻布十番俱樂部(主催舞絃会) 秋海棠、矢作明幸、あゝ無情、松田殊水、城山、斎藤伊水、重衡、入江澤水、月下の陣、伊藤馨水、扇の的、松本露水、湖水乗切、佐藤皓水、白虎隊、関惠水、良寛、熊木施水、吹雪の敵、佐藤源水、赤穂の落日、大沢磯水、掛合夜討、我、菊地甘水、内田琴水、杉本淳水、川中島、直井洋水、畠山重忠、二瓶菊水、木村重成、小山田寛水、外に詩吟七、舞踊三番

山口速水大会 三月二十九日(日)昼夜夜東京浅草雷中会館(主催速水会) 菅公、山口速水、薄陽江、望月嘸江、静、角田益水、常陸丸、三好里水、常盤の前、大沢妙水、西郷隆盛、河合桃水、白虎隊、鶴山松水、桜、狩、田中利水、相模湖、菊地甘水、月下の陣、松山盛水、茨木、落合白水、吹雪の敵、佐藤源水、新撰組、加藤邦水、小栗栖、平野鉦水、熊谷蓮生坊、松本孝水、橋大塚、長、下田瑠水、重衡、小林総水、霧の川中島、谷暉水、伊豆の御難、宮原暉水、大橋公、友吉澄水、羅生門、藤川晴水、龍の口、石崎禎水、毒饅頭、成田伸水、捨児、大村令水、井伊大老、反田昇水、羽衣、末吉、希水、屋島の誓、野川瑞水、掛合川中島、戸谷曙水、内田琴水、松本淳水、戦友、松宮園水、本能寺、田辺宗水、木村重成、北